
続黄金の堅武斗虫 ～水面下の駆け引き～

るーずりーふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続黄金の堅武斗虫 ～水面下の駆け引き～

【Nコード】

N0885N

【作者名】

るーずりーふ

【あらすじ】

黄金の堅武斗虫 ～ミクロムーン島に眠る秘宝～
の続編です。

裏戦

「おばちゃん、いるー？」

日曜の昼下がり、雨が降り始めた頃、三人の子供達が私の店にやってきた。

見かけたことのない子たちだったからよく覚えている。

「はいはい、あら珍しい。あの子達以外のお客なんて。」

そう言くと、三人はお互いに顔を見合わせ、うなずき合った。

「ねえ、おばちゃん、あの子達って『ゴールデンビートルズ』とかいう5人組のこと？」

「そうだよ。あんたたち、友達かい？」

「うん、まあ、そんなとこかな。」

それでさ、その5人組、最近ここに入り浸ってるでしょ。」

「そうそう、なんだか他の子がどんどん来なくなっちゃって、

午後になると、もう毎日毎日あの子達がぐうたらしてるんだよ。」

三人がまた顔を見合わせ、うなずき合う。

「あのさ、おばちゃん、頼みがあるんだ。これを、あいつらに渡し
てくれないかな。」

そう言つて、ポケットから出てきたのは一枚の紙切れだった。

「なんだい、これは。だれかの歌か何かかい。」

「想像におまかせ。何か適当にそれっぽ理由つけて、

あいつらにこれを信じ込ませて欲しいんだ。

できればこれを探しに行かせられるといいんだけど。」

「こりやまた難しい注文だねえ。でも、まあやってみるよ。

いつまでも店の前でダラダラされてもこまるしね。」

「本当？　じゃあ、よろしく。」

あ、そうそう俺たちに頼まれたっていうのは内緒にしておいてね。」
「はいはい、まかせときな。」

不思議な三人のお客は手を振りながら帰って行った。

「あ、そういえばあの子達、なんにも買っていかなかったねえ。」
私はぼつりとつぶやいた。

小さな廃屋に、三人の少年達が集まっていた。

「リーダー、やっと終わりましたね。」

「おいすすき、もうリーダーってのはやめろ。」

それにそのしゃべり方も元に戻せ。やりにくくてしょうがないから。」

「えーっ、結構おもしろかったのに。」

「ははっ、今度からはお前が委員長になるか？いぶき。早く本題に・
・・・・」

「ふざけんな。今回の活動だって、俺はリーダー役なんかやりたく
なかったんだ。」

なあ、すすき。やりたくないって言ったよな。」

「なーに言ってるの。なりきってたくせに。」

「は？俺は、引き受けたことはきっちりやるタイプなんだよ。」

大体な、委員長としてかなたがリーダーやればよかったんだ。何で
俺だったんだよ。」

「まあまあ、たまには気分転換ってことで。はい、じゃあ本題に移
ろう。」

「おい、まだ終わってねえ！」

「うるさい！」

「はい。委員長。」

「よし、本題に入る。今回の活動の目的は、拡大しすぎた張り場争
いの沈静化、

および、隣町の1チームが保持する権力の無効化だった。

いぶき、リーダー会議の結果はどうなった。まだ聞いてないぞ。」

「ああ、忘れてた。『ゴールデンビートルズ』は、

俺たちが自分たちの勝利を認めたから、戦利品はいらないって言うてたぜ。

拡大した張り場も全部元のチームに返すってさ。」

「そうか、ということは成功だな。いや、成功以上の成果になった。」

「成功以上？ どういうこと？」

「実は、この活動には目的がもう一つあったんだ。」

それは優秀な人材のスカウト。つまり新委員さがし。」

「えっ、なにそれっ。」

「俺は前から『ゴールデンビートルズ』の噂は聞いていた。」

チームの全員がそれぞれ優れた特性を持っていることも。

みんなバトルをしてみても気づいただろう？

リーダーである竹本勇大には、最近稀に見るリーダー気質と怪力。

西村智樹には、島一番の俊足と勇氣。

鶴見渚には、端正な容姿と第六感。

柚木聡留には、神に愛されたような運の良さ。

そして、俺が一番興味を持ったのが安川涼。

チーム内では司令塔と呼ばれているそうだが、その頭の働きといい、絶妙に言葉を操り人を動かす力といい、期待を全く裏切らなかった。そこで、みんなに提案がある。

安川涼を新委員としてここに迎えてみてはどうだろう。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・かなた、俺は一人の友達としてお前に訊く。

本当にそんなこと、考えてんのか？」

「そうだ。俺はいつだって大まじめだ。

いぶきだっと思っていただろう？ これじゃ人手不足だっぺ。」

「そりゃあ、思った。思うに決まってる。でも、お前はそれでいいのか？」

安川涼には安川涼の仲間がいる。

俺たちだつて、この三人で一つの仲間なんじゃねえのかよ。」

「そうだよ。私だつてこのメンバーで今まで活動してきて楽しかった。」

いまさら新しい委員つてそんなの、そんなのないんじゃないの?」

「でも、じゃあこれからどうするんだ。外からの依頼まで来るようになったんだ。」

昔みたいに簡単には行かないんだから、誰かを呼ぶしかないだろう。それ以外に方法なんか………。」

「ふざけんなっ!!!」

自転車をとばしてたどり着いた先にあつたのは、小さな廃屋のようだった。

「ここだ。場所にくるいはない。」

ツルが自信を持って言った。

「ヤス、本当に一人で大丈夫か?」

「なにされるかわかんないよ。」

「なんなら俺も一緒に……。」

「大丈夫。あんまり心配するなつて。あいつらがねらってるのは俺なんだろ、ツル。」

「そうだ。」

「だからこれは俺の問題なんだ。ちょちょいっと話つけてくるさ。あつちの頭に話したいこともあるしな。」

俺はみんなに背を向けて、向こうに見える廃屋へと足を進めた。

突入（前書き）

本当の最終話です。

突入

さび付いたドアノブに手を掛ける。

軽く押すと、小さな悲鳴をあげながらドアが開いた。

「ふざけんなっ！！！」

そして、中からも悲鳴が聞こえてきた。

誰かが殴り飛ばされた瞬間だった。

うわっ、なにこれタイミング悪っ。ケンカか？

でも、仕方ない。ここはこっちのペースに持っていかなければ。

「お取り込み中すいませ〜ん。話があつてきたんですけど。」

三人が、ぱっとこっちを向き、ぱっと目を大きく開ける。

「あの〜青空決死隊の皆さんですよね。」

そこまで言つて、にやつと笑つて見せた。

「いや、『ミクロムーン子供平和委員会』だったけ？」

「なっ、なんで知ってんだよっ！」

一人がかみついてくるが、微笑みでかたづけける。

「そう言う君は、神宮司息吹君だよな。」

一昨日のバトルではリーダーをやっていたようだが、ここの委員長は誰だ？」

「……俺だ。」

さっきまで、床に倒れ込んでいた少年が立ち上がった。

その顔には青いあざがでている。

「うわあ、痛そうだね〜如月彼方君。大丈夫？　なんかあったの。」

ま、それはいいや。今日は君たちに言いたいことがあつて来た。」

「ちよつと待て、一つだけ訊きたい。どうして俺たちの正体が分かつたんだ。」

それからこの場所も。」

如月彼方が一歩近づいて訊ねてきた。

「ああ、きみたちねえ、ゴールデンビートルズなめないでくれる。」

そのくらいツルの情報網使ったらいちんちでわかんだよ。青空決死隊で張ったらちよつとしか掴めなかったのに、もしかと思ってうわさに聞いてた委員会で張ってみたらあつという間にいろんな情報が入ってきたよ。」

三人が同時に渋い表情になった。

「いいかな、じゃ、本題に入らせてもらう。」

これは、なんだ？」

俺が取り出したのは、小さな虫かごに入った金色のカブトムシだった。

神宮司息吹が答える。

「なんだって、お前らが捕まえた黄金の堅武斗虫だろ？」

「まだそんなこと言ってるのか、いい加減白状しろよ。」

これは、ただのカブトムシだろ？ ご親切に金のスプレーがかかっているけどな。

この俺に見破られないとでも思ったか？ 他のヤツは騙せても、俺にはまるわかりだ。

あのバトルが君たちに仕組まれたものだったことも含めて。」

「それについては悪かった。謝ろう。」

しかし、このバトルでゴールデンビートルズは変わったのだろう？ それならこちらは感謝される側だと思うのだが。」

如月彼方が挑戦的な目つきでこつちを睨んだ。

しかし、アザのついた顔ではいまいち迫力に欠ける。

「礼を言うつもりはない。そんなことのためにここに来たんじゃないんでね。」

もう一つ、訊きたいことがある。何でいきなり俺たちを変えようと思ったんだ。」

しばらくの沈黙。

「依頼が来たのよ。」

棘すずきが初めて口を開いた。

「依頼？」

「そう。私たち『ミクロムーン子供平和委員会』はちよつと前まで、自分たちの耳に入ってきたこの島の問題を解決してきたの。でも、それもだんだん評判が上がってきて、今じゃいろんなところから

問題解決の依頼が来るようになったわけ。

で、今回は、あなたたちにやつつけられたあるチームのリーダーからの

バトルばかり申し込んで、勝ち続けて、張り場ばかり大きくなったチームに困ってるって

ハガキが届いたの。」

如月彼方が会話を遮るように入ってきた。

「そうのことだ、安川涼。こちらからも一つ頼みがある。」

神宮司息吹と棘すすきがはつとした表情になり、如月彼方を仰ぎ見る。

「実は、この委員会に」

最後まででは言わせなかった。

「なあ、如月彼方。お前、気づいてた？」

その顔のアザ、奇跡的な位置にヒットしてるんだぜ。

顔面って、一力所だけ痛みをあんまり感じないところがあるんだよね。

見た目ほど、痛くないはずだよ。さあ、これはどうしてかな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「もう俺の話すことはない。さ、帰ろうかな。」

後ろを向いて、ドアに向かって歩き出す。

誰も、何も言わなかった。

ドアが閉まる瞬間、俺は言った。

「本当の仲間って、なかなか見つからないモンだぜ。」

ぱたん、と小気味のいい音がして、背後のドアが閉まった。廃屋を出ると、

「大丈夫か、ヤス！」

「ケガしてない？」

「なに言われたんだ。」

心配の嵐が俺を待っていた。

「おいおい、話したただけだって。大丈夫だよ。」

タケがまだ言ってくる。

「なにを話してたんだよ。」

俺はふっと笑った。

「協力してくれたお礼の問題解決返しつてときさ。」

安川涼の背中がドアの向こうに消えてから、如月彼方は神宮司息吹に向き直った。

「いぶき、知ってたのか。いや、柔道三段のお前が知らないわけないよな。」

だから、ここをねらったんだろう？」

神宮司息吹がそっぽを向いて言った。

「そんなんじゃないよ……」

「ねえあなた、わかったでしょ。なんだかんだ言っても結局手加減しちゃうんだよ。」

これが本当の仲間なんじゃないの？」

棘すすきの言葉はどこまでもやわらかい。

「ああ、そうだな。悪かった、あんなこと言つて。俺、どうかしてたな。」

ここから増えても、減っても、そんなの俺たちじゃないもんな。

大変でもいい。三人で頑張ればなんとかなるさ。

いぶき、あなた、これから委員会やってこうな。」

「もちろん。」

「あつたりまえだろ。」

二人の笑顔を受け止めてから、如月彼方は「よしっ」と立ち上がった。

「まだ、もう一仕事あるんだが。忘れてないか。」

そう言つて、一枚のハガキを取り出す。

「あつ、依頼の返事!!」

「ご名答。」

「まだ書いてなかったのかよ。もうとつくに届いてる頃だと思つてたぜ。」

神宮司息吹の文句は棘すすきの一言で片付いた。

「いいじゃん、いいじゃん。みんなで書こうよ。」

ミクロムーン子供平和委員会のみなさんへ

こんにちは。ぼくはとあるチームのリーダーです。

昨日、ぼくのチームが「ゴールデンビートルズ」というすごく強いチームとバトルして、

こてんぱんにやられてしまいました。

張り場も取られました。

近所のチームも全部「ゴールデンビートルズ」に張り場を取られてしまいました。

僕たちの町では他のチームの張り場では遊べない、というルールみたいなものがあるんです。

このままでは遊び場所を全部「ゴールデンビートルズ」に取られてしまいます。

他のチームもみんな困っています。

僕たちの張り場を「ゴールデンビートルズ」から返してください。お願いします。

若須良也より

「ねえねえ、思ったんだけど、この依頼人の名前って………」

依頼を読み直していた棘すすきが二人を呼んだ。

神宮司息吹がハガキをのぞき込む。

わかすりようや

如月彼方は、はっと息をのんだ。

「……そうか、シナリオはあっちが握ってたってわけか。俺たちは、とんでもない思い上がりをしていたようだ。」

若須良也さんへ

問題は無事、解決しました。ご安心ください。

「ゴールデンビートルズ」は、もう張り場を取ったりしないでしょう。

あなたとあなたのチームが平和であることを祈ります。

追申 こちらの問題も、おかげさまで無事、解決しました。

まったく、あなたにはかないません。

そちらに渡った情報は忘れて頂いて結構です。

ご無礼をおかけしましたこと深くお詫び申し上げます。

それでは、安川涼さんによりしくお伝えください。

ミクロムーン子供平和委員会より

突入（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

これは中一の時にテスト前頑張ったものです。
発掘したので投稿してみました。

うーん、まだまだですね。

もっと頑張りたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0885n/>

続黄金の堅武斗虫 ～水面下の駆け引き～

2010年10月15日22時00分発行